読むメッセージ　――イエスとの出会い――　③　　BY　関真士牧師

「新しい歩みの始まり」

　その後、ユダヤ人の祭りがあって、イエスはエルサレムに上られた。エルサレムには、羊の門の近くに、ヘブル語でベテスダと呼ばれる池があり、五つの回廊がついていた。その中には、病人、目の見えない人、足の不自由な人、からだに麻痺のある人たちが大勢、横になっていた。そこに、三十八年も病気にかかっている人がいた。イエスは彼が横になっているのを見て、すでに長い間そうしていることを知ると、彼に言われた。「良くなりたいか。」病人は答えた。「主よ。水がかき回されたとき、池の中に入れてくれる人がいません。行きかけると、ほかの人が先に下りて行きます。」イエスは彼に言われた。「起きて床を取り上げ、歩きなさい。」すると、すぐにその人は治って、床を取り上げて歩き出した。ところが、その日は安息日であった。　ヨハネの福音書 5 章 5～9 節

ベテスダという名の現代社会

　ヨハネの福音書５章１節から９節を通して、イエスとの出会いを見てましょう。ここで、イエスと出会った男は、38 年間に亘って病の床に臥せていました。しかし、主と出会ったその瞬間から彼の人生は変えられたのです。

　その出会いは、ベテスダの池を取り囲む回廊においてでした。ベテスダとは、「あわれみの家」という意味です。

　この池の周りには、大勢の病人が集まっていました。なぜなら、この池の水が動いたときに、一番最初に池に入った者は病が癒されると信じられていたからです。おそらく間欠泉のようなものだったのでしょう。病人たちは、癒しを求めて、この池の周りで水が動くのを待っていたのです。

　それにしても、なんと過酷な世界でしょうか。水が動いたと分かったら、全員が一斉に池を目がけて動き始めるのです。なぜなら、癒されるのは一番最初に池に入る者だからです。まさに競争です。一番最初に池に入れる者とは、一番元気で強い者です。必然的に弱者は取り残されていきます。この場は、同病相憐れむというような、お互いが譲り合うような穏やかな優しい世界ではなく、強者だけが生き残っていく過酷な競争社会です。ベテスダ（あわれみの家）という名前は、何という皮肉でしょうか。「あわれみ」とは、まさに正反対の容赦のない弱肉強食の世界がここにあったのです。

　さらに、もし仮に一番になって池の中に入れたとして、そこで癒されるのかを言えば、それは迷信です。この池には、そんな力はありません。やっとの思いで競争に勝ち抜いても、そこにあるのは迷信に踊らされた虚しさだけです。

　まさに現代社会は、このベテスダの池のようです。競争社会の中で、常に周囲の比較の目

に晒され、そこで脱落した者は負け組とされ、仮に勝ったと思ってもそこに真の癒しはなく、次の瞬間には、二番に落ちないための終わりのない競争が待ち受けているのです。
　この競争に勝ちさえすれば幸せになれるという迷信に踊らされて、走らされて、追い立てられて、自らを失っていき、勝っても負けても、真の癒しはないというのが、現代社会のあり様です。それでも、この社会から離れることはできない。ベテスダの池のほとりに、38 年間でも、何十年でも、そこに居るしかいないというのが、この社会に生きる者の現実です。

本当に、よくなりたいのか？

　このベテスダの池に 38 年もの長きに亘って臥せていた男がいました。そこにイエスが来られたのです。イエスは、この男に「よくなりたいか」と語り掛けました。
　よくなりたいのは当然だろうと思いがちですが、意外と私たちは、そうでもないことがあります。私は、精神科に入院している方を一年間、週に一回、片道 1 時間かけて通ったことがありました。彼は 20 代前半でした。もちろん治りたい、早くここから出たいと言っていました。私も話を聴き、祈り、励ましてきました。
　そして一年が経った頃、彼は私に「先生、本当は治りたくないんです」と告白したのです。なぜかというと、治ってしまったら、決まった時間に朝起きて、仕事をして、稼いで、自立しなればならないからです。これまでのように病気なんだから仕方ないとは言ってもらえなくなるのです。それよりは、病気のままで、出来なくても仕方ないよねと言ってもらえる状況にいた方が楽だということなのです。
　またある方は、癒されたら障害者優先の駐車スペースが使えなくなり、様々な補助が受けられなくなるので、このままでいいという方もおられました。
　さらには、自分の過ちによって人を傷つけてしまったことで罪悪感を持ち、自分がこのような病にあるのは課せられた罰だと受け止め、癒されることを求めない、いえ求めてはいけないとさえ思っている方もおられます。
　本当に心から治りたいと思っている大多数の方にとっては、心穏やかな話ではないと思いますが、このようなケースもあるということです。
　さて今、イエスが私たちに「よくなりたいか？」と尋ねられるとしたら、なんと応えますか？　実際の病のことでも、心のこと、仕事のこと、家族のこと、人生のこと...。本当に癒されていいですか？　癒してください！　と祈りながら、本音の部分では、実はこのままでいいと思っていることがないでしょうか？
　例えば、癒されたら、出来ないという言い訳はできなくなります。赦せない心が癒されたら、もう怒ることも、憎むことも出来なくなります。関係が癒されたら、その人と和解し仲良くなります。仕事がよくなったら、この仕事を続けなければなりません。
　「よくなりたい」と答える方がほとんどでしょうが、人の心とは複雑なものです。念のために、「本当に、よくなりたいのか」と自問して考えてみるのも無駄ではないでしょう。私たちは、求めながらも、実際には得ることを拒否しているという矛盾を抱えていることがあります。

よくなりたい、でもなれない

　この男は、「主よ。私には、水がかき回されたとき、池の中に私を入れてくれる人がいません。行きかけると、もうほかの人が先に降りて行くのです。」と答えました。この答えは一見、はっきりとしない、言い訳のように聞こえます。しかし、その意味は「よくなりたい」です。なぜならこの男は、池に行くという行動を起こしているからです。
　この男の答えは、事実です。嘘ではありません。この男を助けてくれる人はいないのです。いくら頼んでも、お願いしても、誰も助けてくれる人はいないのです。それで自分で「行きかける」のです。腰を浮かして、なんとか行こうとするのです。38 年間、そうしてきたのです。もう無理に決まっていると分かっていても、行こうと身体は動くのです。決して諦めているわけではないのです。助けてくれる人はいない。自分でも行こうとするが他の人が先に行く。その通りなのです。
　そして、この男のことばのもう一つの意味は、「私は救ってくれる人はいない」ということです。自分は、よくなりたい、しかし他人は自分を救えない。自分も自分を救えない。
　この男のことばの中には、「よくなりたい」と「人には出来ない」という二つの意味があります。この二つが揃うとき、イエス・キリストとの出会いの準備が整うのです。
　あなたの内に、この二つのことばがありますか？　清くなりたい、でも人の力ではなれない。主に従いたい、でも人の力では出来ない。愛に満ちた者になりたい、でも人の力では出来ない。赦したい、でも人の力では出来ない…　などなど。
　この二つの言葉が揃うとき、私たちは、主を求め始めます。そして、主の恵みを経験するのです。

愛は、あるのか。

　イエスは、言われました。「起きて、床を取り上げて歩きなさい。」
　このことばと同時に、「その人はすぐに直って、床を取り上げて歩き出した。」のです。歩きなさいという行動を即すことばには、それが出来る恵みが常に伴っています。主の命令形のことばには、必ず、それを行うことのできる恵みが伴っています。歩きなさいと言われたなら、歩くことのできる癒しの恵みが、そこにあるのです。
　しかし、注目すべきは、歩くだけではなく、「床を取り上げる」ということです。床を取り上げるという行為は、当時の安息日に関する戒めに違反することになります。ですから「ところが、その日は安息日であった。」ということばが記され、10 節以降、この違反に関して、ユダヤ人からイエスへの激しい攻撃と、それに対するイエスの教えのことばが続くのです。
　「床を取り上げる」とは、実際にはゴザのようなものを丸めて担ぐことを現わしています。それが運搬の労働に当たるということです。これは律法に付則して作られた「ミシュナー」という細則にあることで、安息日の労働に関しては 39 の細則があると言われています。
　ですから、イエスは律法そのものを破ることを命じたのではなく、人間が勝手に付け加え

た細則に関してのことなのです。
　イエスは、あえてこの男に「床を取り上げる」ように命じました。床を置いたまま歩いて行ってもいいのですが、あえて床を取り上げさせました。それは、安息日を制定された父なる神の真意を明らかにするためです。17 節に「イエスは彼らに答えられた。『わたしの父は今に至るまで働いておられます。ですからわたしも働いているのです。』」と語られました。
　また 42 節では「ただ、わたしはあなたがたを知っています。あなたがたのうちには、神の愛がありません。」と語られました。本来、人のためにある安息日が、安息日のための人になってしまいました。愛が失われ、人を守り助けるための戒めが、人を裁き苦しめるものになってしまいました。
　本来は、神の律法を守り行おうという純粋な思いから始まった細則の作成も、愛がなければ、何の意味もなくなります。愛がなくなるとき、神の御心が分からなくなるのです。なぜなら神は愛だからです。「愛のない者に、神は分かりません。なぜなら神は愛だからです。」（1 ヨハネ４：８）
　ここに登場するユダヤ人たちは、私たちにとっての反面教師です。その熱心さに、愛はあるのか？　愛がなければ、それは何の役にも立たないのです。そればかりではなく、人を傷つけ、神から引き離すことになってしまうのです。

床を取り上げて、歩きだそう！

　今を生きる私たちも、様々な戒めを作り出しているようです。本来神が意図した生き方とは、正反対の新しい律法を作り上げています。その代表的な律法が、「生きることは競争。競争に勝たないと、幸せになれない。」です。これもまた迷信です。ベテスダの池という現代社会において、この迷信に縛られて、床の上に臥せている人々が大勢います。
　比較、競争の価値観の中では、常に周囲の評価を気にして、そこに自分の存在価値の決定権が奪われ、神のかたちが失われていきます。そして、比較、競争には終わりがありません。一番になり続けることはできないのです。特に現代の日本社会において、この価値観から解放されない限り、クリスチャンといえども、真の平安はないと思わされます。
　そしてもし、この価値観に留まったままで奉仕を頑張り、クリスチャンとしての存在価値を測っていくならば、その信仰生活はすぐに行き詰ることでしょう。それはまるで、床を取り上げないで、歩いているようなものです。イエスが、あえて「床を取り上げる」ように言われたのは、間違った安息日に関する戒めを打ち破るためでした。もし私たちが、床を取り上げないで、つまり現代における戒め、この世の価値観の中に留まり続けるなら、新しい一歩を踏み出すことは出来ないのです。ですから主は、まず「床を取り上げて」から歩くように語られたのです。
　この男は、床を取り上げ、そして歩き始めました。それは、彼にとって勇気のいることだったと思います。「床を残したまま歩くわけにはいきませんか、その方が波風立たなくて楽なのですが」と思ったかは分かりませんが、ユダヤ人として安息日に床を上げることが何を意味しているのかよく分かっていたはずです。

それでも、もし床を取り上げなかったら、この男の人生は、本当の意味では変わらないのです。病は癒されても、人生は変わらないのです。なぜなら以前と同じ戒めと価値観の中に生きることになるからです。新しく生きるためには、床を取り上げなければならないのです。

この男が、それが出来たのはただ一つ、イエスに出会ったということです。イエスの「起きて、床を取り上げて歩きなさい。」ということばは、今も、私たちに語られている神のことばです。

比較、競争ではなく、神のかたちに造られたオンリーワンの自分を、与えられた賜物を活かして、主の体の一部として、互いに助け合い、支え合い、赦し合い、そして愛し合い、主を見上げて生きるのです。この世の迷信ではなく、神の真理に生きるのです。偽りの価値観に生きていた、偽りの自分を脱ぎ捨てて、新しく造られた、新しい自分を生きるのです。

そして、文字通りの「ベテスダ（あわれみの家）」を、この世に建てるのです。その家の主は、イエスです。イエスこそ、神の「あわれみ」そのもののお方です。その「あわれみ」の頂点が、イエスの十字架です。私たちが、十字架を掲げている教会を建てることは、この世に真の「ベテスダ（あわれみの家）」を建てていることなのです。

「床を取り上げて」歩き始めましょう！